

Mathew L. Jones, *The Good Life in the Scientific Revolution:
Descartes, Pascal, Leibniz, and the Cultivation of Virtue*
University of Chicago Press, 2006. pp. 361 \$ 27.50.

下野 葉月

本書はタイトルが示す通り、科学史が扱う領域に関心をもつ読者に向けて書かれた著作である。とはいえ、本書では特に科学革命という概念自体が問い直されるのではなく、一般的に科学革命が生じたとされる17世紀を背景に、副題に連ねられた「哲学者」——デカルト、パスカル、ライプニッツ——がいかなる宗教的・道徳的理念のもとに人間の知のあり方を捉えていたのかが丁寧に考察される。この三人は17世紀の「哲学者」として知られる一方、「デカルト座標」や「パスカルの三角形」、そしてライプニッツにおいてはニュートンと同時期に微積分を発明したという功績で知られているように、数学を自らの思想に取り入れようとした点において共通している。著者はそこに着目し、現在「哲学者」として学問上区分されるこの三名が、哲学や科学、数学をどのように捉えていたかを分析していく。そこに打ち出されているのは、現在でこそ「科学的」と思われているような知識や実践は、「哲学」である以上に、道徳的で良き人生を送るために役立つ道具と考えられていたというテーゼである。本書の主張によれば、これら三人の哲学者は、副題にもなっている「徳をつむ(Cultivation of Virtue)」ための手段の一つとして、数学の問題に取り組み、より良き人生を送るために哲学を実践していたのだ。

確かに「哲学」はしばしば純粋な思想体系として捉えられることがある。あたかも思想の源泉となる哲学者の人生や生き方、信仰などとは切り離されたものとして理解されなくてはならないかのように。そのような「哲学」理解を横目に、本書の著者は「哲学者」の営為を再び彼らが生きた人生や時代のコンテクストにおいて捉えなおし、彼らのテキストを読み直して行くというスタンスを選択している。このような著者の哲学をめぐる問題関心は、フランスの古代哲学研究家アドーの研究に依拠している。アドーは、哲学のあり方をセネカやキケロなどの古代哲学に遡って研究し、哲学を倫理的・精神的営為としてとらえなおした。そして、哲学というものがそもそも道徳的な営為であり、人生をよく生きる指針となるものであったという解釈を打ち出した。古代の哲学は倫理・哲学の知的体系には還元されず、理性的な自己を磨き上げるために必要な修練が含まれていたとする彼の考えは、著者が引用するセネカの言葉によく表現されている——「哲学は魂を育成し鍛え、人生に秩序をもたらし、行動を規律づけるものである。自己の最良な実現のために、なにをすべきか、なさぬべきかを教えるものである。船の操舵室にどっしりと腰をおろして舵をしっかりと握り、暗礁から暗礁へとさまよう人生の航海者たちに、明確な方向を示すのだ。」⁽¹⁾ アドーはこのような哲学の目的と実践に関わる見方がいかに広く浸透していたかを説き、

哲学が歴史的に正誤や善悪を分けるための体系的な知識以上のものであったことを強調した [p.5]。著者のジョーンズもその視点を採用して、近代の「哲学者」——デカルト、パスカル、ライプニッツ——でさえもが同じように哲学をある種の実践としてとらえ、より良き人生を送るための知性を活性化させるために、もしくはその限度を知らしめるために数学を自らの思想に取り入れていたと論じる。三名の哲学者にとって、科学や数学として分類されるような仕事に従事することは、自己の道徳観を育てることや知識人になることと同じことであったと著者は指摘する。

本書は以下のような三部構成をとり、デカルト、パスカル、ライプニッツの三名がほぼ均等に扱われている。彼らは生年の古い順に並べられ、冒頭に論じられるデカルト思想の影響が同じ17世紀を生きたパスカル、ライプニッツにも及び、各々の思想に異なった形で現れていることが示される。

第1部：デカルト

第1章 霊操としての幾何学

第2章 真実の修辞学的な歴史

第2部：パスカル

第3章 数学的關係

第4章 不均衡の人間学

第3部：ライプニッツ

第5章 表現の形式

第6章 全てを一度に見ること

本稿においては先ず各部の概要を紹介した後、デカルトについての著者の議論を重点的に紹介する。

本書においてまずはじめに取り上げられるのがデカルトの『幾何学』（1637）という作品である。デカルトは幾何学の実践を通して明晰・判明（clear and distinct）な観念を認識することができるという信念をもっていた。デカルトは、通常長時間にわたる推論と思考の結果導き出される数学の論理は、本質的には「明晰・判明」に、そして一度に理解することが可能であり、そのようにして理解されたもののみが本当の知識なのだと解釈していた。著者はデカルトが求めた明証的（evident）確かな知識という概念は、彼が教育を受けたイエズス会系の教育機関で教授されていた修辞学や詩学と深い関わりがあるとする。そこではカトリック宗教改革の一環として、人を感動させ、功德を施し、神に近づくことを可能にする話し方や書き方が教えられていた。著者はそのようなイエズス会の修辞学的方針がデカルトに「明晰」「判明」といった価値を植えつけたと分析する。さらにイエズス会が奨励した「霊操」——精神的な鍛錬（spiritual exercises）——は、16・17世紀に急激に増えた神秘家たちの更なる増加をくい止め、彼らをふたたび教会権力へととりこむためのものであり、デカルトの「明証性」への傾斜も、その文脈の中においてみることができると論じる。

パスカルについての章では、著者はオネットム（honnête hommes: 文化的素養の高い紳士）と

いう視点を重視しながら考察し、パスカルの数学や自然哲学がオネットムの会話を楽しむ社交の場で培われたという説を唱える。パスカルは、デカルトが求めた明証的な数学や、真理に到達するための方法を否定し、むしろ数学的な実践は人間の力の限界をすぐさま明らかにすると考えた。そして、デカルトの「明証性」を墮落した人間の過ちのもとに築かれたものとして、デカルトのことも、そして彼を育てたイエズス会のことも批判する。より厳格なカトリックの宗派であるジャンセニズムに同調していたパスカルは、イエズス会の教義とは異なり、数学や自然哲学が人間の能力のなさを知らしめ、価値のなさや悲壮感を掻き立てるものでなければならないと考えたのだ。

第2部の最後ではパスカルの「自然/本性 (nature)」という概念について丁寧に考察されている。パスカルは「自然・本性(nature)」を追求した結果、人間性 (human nature) とはある普遍的なものとして存在するのではなく、ただ帰納の積み重ねによって歴史的にそのようなものがあるように措定されているだけであり、実際の人間性たるものはむしろ「怪物性 (monstrosity)」という言葉によって一番よく表現されると結論付けた。つまりパスカルは、人間性とは、通例そこに期待されてるような統一性や普遍性を欠くものだとして定義するのだ。パスカルはそのような人間性を理解する際、「哲学」は力不足であるとの結論を導き出し、最終的に人間に救済をもたらした人間の怪物性を説明できるのは、唯一キリスト教の聖書であると考えていた。著者はこのようにパスカルの思想に占める宗教的理念の影響の大きさを強調する。

最後に紹介されるライプニッツは、パスカルとは異なり、自然哲学や数学は実際的な生産性をあげるために使用されるべきだと考えた。著者はまず、特にライプニッツの初期の作品に焦点を絞り、1670年代のパリ在住中に鏡やレンズを駆使した自然魔術的な実験——アナモルフォーシス (歪像) や遠近法図——に大きな関心を注いだという事実に着目する。そして、その関心が神と人間の視点や観点を機軸とした哲学的な思想の形成に大きな役割を果たしたと論じ、これまでの研究においては重視されてこなかった自然魔術的な要素をライプニッツの思想形成の歴史の中心に組み込んだ。即ち、遠近法ではある一つの固定された視点が作図の中心的な役割を担うが、ライプニッツはそのような作図法をもとに、神は全ての視点を保有しているが、人間は限られたわずかな視点に隷属させられているという哲学的な思想を展開させた。神と人間の知を隔てる差異は、人間が限られた視点しか持っていないということによって説明されるが、ライプニッツはこの差を縮減するために、なるべく多くの視点を一度に見せるための表記法の開発に身を投じる。そして、ハノーファー公爵領の顧問として務めるようになると、前述のような多くのものを「一度に見せる」技術を国の統治にも活かすべきと主張し、国の情勢や宗教間の対立など多様な状況や可能性を一度にして見ることができると記号法を導入しようとした。

ライプニッツの表記に対するこだわりは、彼がデカルト流の「明晰・判明」な知の直観的獲得の不可能性を確信したころに萌芽し、微積分法の土台となる求積法の考察において、円の面積を無限級数として表現できたことによって拍車がかかけられ、やがて彼の数学的・哲学的探求の根幹を成すようになる。代数的な表現を数学の悪しき例としてとらえ、瞬間的に全てを直観する幾何学的方法を奨励したデカルトとは対照的な関心を抱いていたライプニッツは、『形而上学叙説』(1686)においてデカルトを厳しく批判することになる。彼は、デカルトらの機械論的な世界観にもとづく力学では、落下する物体や振子の動きなどの現象を説明できないことを指摘し、この

誤りは、スコラ哲学にはあった「形相」の概念を追放してしまったことに由来すると論じる。「物体に実現されている全ては、近代人（デカルトなど）が説得しようとするように延長と様態のみによって形成されるものではない」[p.263]と述べるライブニッツは、現実というものが機械的な在りよう以上のものであって、むしろ、デカルトらが退けた形相によって満たされているスコラ的世界に近いと考えたのだ。

ライブニッツが、世界にある実質的な「形相 (form)」の存在に気づくことによって「機械論哲学の冒涇を浄化することができる」[p.264]と明言するとき、彼は神が目的や結果についての思索なしに世界を創ったという機械論哲学の危険な影響と向き合ったのだと著者は評価する。更に著者は、ライブニッツがイギリスのボイルやニュートンのように単なる機械的なものを超えた原理の存在を実験と観察を通して確証させようとしたとも評価する [p.265]。こうしてライブニッツは神の存在を明らかにするために自然探求をすすめていた者たちの一群に列せられ、「神の役割を確保し、純粋な唯物論哲学が適切な神性や政治的秩序、道徳的組織に与える危険を回避しようとした」[p.265]と描写されるが、これは著者の機械論・唯物論哲学に対する批判的な評価のあらわれのように思われる。

以上、本書の全容を概観した。続いて第1部の議論をより厳密に追っていく。

第1章、第2章で浮き彫りになるデカルトの姿は、感覚で認識することができる身体と意識とを切り分けた「近代哲学者」ではなく、神秘主義的思想とイエズス会の「霊操」の伝統に深く 뿌 ざす人物であり、そこに著者が描いた本書の構想の発端をみることができる。第1章「霊操としての幾何学」ではデカルトが数学を一種の霊的な「行」として捉えていたことが明らかにされる。イエズス会の創設者であるイグナチオ・デ・ロヨラは「霊操」という精神的な「行」による神とのつながりを説いていたが、デカルトの数学も霊操の一種として解釈できるというのが著者の考えである。

ロヨラの「霊操」概念とデカルトの哲学的思想には類似する基層が見受けられ、本書においてもその関係性は詳しく分析されている。最も理解しやすい例は、デカルトの「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する」という原理に到達するまでのプロセスと、ロヨラが提唱した霊操の実践との類似性である。ロヨラによると、霊操とは「良心を究明すること、観想すること…霊操は魂を準備し、調えるあらゆる方法」⁽²⁾であって、霊操が目指すことは、「まずすべての邪な愛着を己から除去した後、魂の救いのために自分の生活をどのように調えるかということについて、神の御旨を探し、見出すこと」⁽³⁾である。デカルトは『方法序説』の第4部で真理の探求のために、少しでも疑いをかけうるもの全てを誤りとして絶対的に排棄し、疑いえないものが残るかを問う、所謂方法的懐疑を行うが、これは前述のロヨラが提唱した霊操のはじめにある全ての愛着を除去するという行為の実践ともとらえられる。デカルトは一切を疑うという霊操の「行」に集中している最中に、その根底にあった自己の存在を発見し、考えをめぐらしている他でもない自分の存在を証明する。そして、その「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する」という命題において、真理を語っていると保証するものは、それが極めて明晰にわかっているということ以外にまったく何もないことを認め、「極めて明晰かつ判明に捉えることはすべて真である」という原理を導きだした。

著者は、デカルトが数学や幾何学を「明晰・判明」な秩序をとらえ、はっきりと物事を見て考える「訓練」としてとらえていたと論ずる。その際、デカルトの最も有名な著作である『方法序説』ではなく、それに続く三部作『三つの試論』—屈折光学、気象学、幾何学—の三番目にあたる『幾何学（1637）』を考察の対象としている。デカルトは1620年代から数学をよりよく思考するための演習と捉えはじめたが、イエズス会系の学校ラ・フレーシュ（La Flèche）で学習した数学は騙しや商売のためのものだとして軽蔑していた。〔p. 19〕数学を改善しなくてはならないという使命を自らに課すようになったデカルトは、ルネサンス期によく見受けられる古代に囚んだ説話の影響を受けていたと著者は言う。その説話とは、次のようなものだ：古代人は数学の簡単な方法が開示されてしまうとその価値が下がると思いこみ、その業そのものは教えず、その結果として得られるつまらぬ「真理」を数学の中に詰め込み、ある程度の知能があればそれを解明できるようにした。この古代人の計略に惑わされた人々は、そのつまらぬ「真理」に酔いしれ、「真理」とその解明の方法との関係を見て行くことを怠った。〔同〕それが故に、人間は真なる数学を失ってしまい、それと共に真なる知識、発明・発見の力をも失ってしまった。このようなある種の神話적着想から発展したデカルトの数学に対する感性は、デカルト独自の数学観念を育てあげ、彼をして、＜数学は知性を養うべきものである＞という考えを抱かしめるようになる。

続いて著者は、デカルトが最も理想としていた知のあり方である「詩的な知」をとりあげ、それに必要とされる美質のために、幾何学による精神的鍛錬が要求されるようになる背景を説明する。デカルトは詩的な知の美質として、詩が創られる背景にある詩人の想像力や、ものごとを相互連鎖的につなぐ統一性を把握する能力に価値を見出した。そのような統一性の把握を可能にするのが、「明晰・判明（clear and distinct）」な認識の性質であり、この性質にデカルトは魅了されて、その後形成される数学観念も大きな影響を被る。この「明晰・判明」な性質は、神があらわにしようと選んだ真実を人間に認識させるのだが、デカルトはそれを人間が持ちうる神との関係にかかわるものとして理解していた。デカルトは「明晰・判明」な体験をするためには、秩序を明確に体験することを習慣づけることが必要であると考えた。そのためにデカルトが薦めたのが、編み物や刺繍であり、そして何より幾何学の演習であった。デカルトはあらゆる幾何学の問題を解くために多様な曲線を描くことができる器具を作成したが、そのような器具を用いて体を動かしながら幾何学の問題に取り組むことによって、「明晰・判明」を体得する霊操の習慣を養い、真理を直感する術を身につけることを奨励した。そのような実践を伴う幾何学に対して、代数は自動的な数学的行為を行わせる危険性がある上に、知的習慣や能力を啓発することがないとしてデカルトはいたって批判的な姿勢をとった。このようなデカルトの思想における代数に対する幾何学の優位も、彼が幾何学に期待した霊的な次元を際立たせていると言える。

幾何学の演習に代表される認識の訓練は、デカルトが思い描いていた良き生の中でどのような役割を果たしたのか？ 著者は、幾何学から一步踏み込み、デカルトの「論理」に関する思考の道徳的次元を探っていく。デカルトは真の論理とは、我々が、人間の本当の能力を知り、無知であることを発見するために理性の導き方を教えてくれるものであり、人間は数学や形而上学、物理学などによって論理的思考を培うことにより、良い判断をし、平安な心を手に入れ、己の領分を知ることが可能になると考えていた。例えば、自然について適切に思案することによって、神の御業を正しく判断し、神の力と善が無限であることを知るといいうようにである。そのような判

断力を養う理想的な「良き数学」は、自己を完成させるための訓練の中で最良のものであるとデカルトは説き、その考えはベルナール・ラミー (Bernard Lamy) やピエール・ニコール (Pierre Nicole) といった人々を感化した。著者は、このような事実を踏まえ、デカルトの数学観念はより一般的な教育プログラムとして発展して行ったという歴史の埋もれた一面を明るみに出す。その教育プログラムでは、真理をとらえることができるように訓練し、知性の限度と力を明らかにする数学が重視されたが、その際、知性を鍛えあげるために役立たない部分は数学から排除すべきであるというデカルト独自の数学理念が引き継がれた。

著者はデカルトが数学者、自然哲学者、形而上学者として以上に、数学的な実践を核とした人生の生き方を提示した哲学者として受容されていたと主張する。[p.54] デカルトの数学理念に共鳴した人々による教育プログラムの伝播も、そのようなデカルト数学の受容を裏付けるものとして著者は紹介している。デカルトの仕事は様々なデカルト主義と呼ばれる思想の流派を生み出し、ラミー (Lamy) やアルノー (Arnauld) といった人物によって拡張され、特に『幾何学』はラテン語の豊富な注釈を携えて独自の道を歩むことになった。[p.53] 現在でこそ『方法序説』として序説のみが単体で出版されるのが一般的であるが、『方法序説』に続く3つ目の作品である『幾何学』こそが、その「方法」を証明していると唱えたのは他ならぬデカルトであると著者は指摘し、その作品に秘められた歴史を印象的に伝えている。

第2章「真実の修辞学的な歴史」では、古典研究家のメリック・カソーボン (Meric Casaubon) 等によって指摘されたデカルト哲学の危険性と、「明晰・判明」な知の起源との関係が検証されている。カソーボンは1654年の著作『熱狂についての論考 (*A treatise concerning enthusiasme, as it is an effect of nature: but is mistaken by many for either divine inspiration, or diabolical possession*)』において神秘主義と並んで「近年人気を博している数学」の危険性を警告し、全てを一度に把握する直観を養うために幾何学の演習を行うといったデカルトの「方法」をイエズス会の神秘主義論と関連づけて論じていた。著者はこの批判を積極的に評価した上で、デカルトが唱えた「明晰・判明」は、実のところ彼が理想としていた詩的な知のあり方と、彼が教育を受けたイエズス会系教育機関にて採用されていた修辞学の伝統に着想を得たものであったと指摘する。

著者はデカルトの初期作品⁽⁴⁾から、彼が抱いていた詩的な「知」の理想を導き出す。それは、全てを繋がりのもとに統一的に把握し、感動を促すべきもので、想像力を必要とする。デカルトはこのような理想を、音楽や詩のみならず「知」において求めたのだった。1620年代に書かれた『精神指導の規則』においては、新しい数学に見られる統合的で明証性のある知についての説明がなされるが、そこでは直観の明証性と確実性が必須であるとされている。そこで重要なのは、デカルトが言う「明証性」には、「明晰・判明」だけではなく「同時性」が含まれていたことだと著者は指摘する。この同時性は、相互連鎖的な全てのつながりを一度にして認識することを意味し、デカルトが唱えた「直観」と関係していた。「直観に求められることは二つ……直観された陳述は明晰・判明に理解されねばならず、そしてそれは少しずつではなく、一度にして理解されねばならない。」⁽⁵⁾

著者はデカルトの著作を歴史的に分析し、以上のような直感知に関連する「明証性」の概念が、「明晰・判明」が強調される以前からはっきりと意識されていたと指摘する。即ち、『精神指導の規則』では、「明晰・判明」よりも「明証性」、つまりはっきりとした (evident) 直観について

述べられていると著者は指摘し、デカルトの初期の作品においては明証性（evidence）が重要な概念だったが、後の1640年代に書かれた『省察』や『哲学原理』といった作品において、「明晰・判明」がより中心的な部分を占めるようになったと論じる。その際まず、デカルトとローマの弁証家クインティリアヌスに共有される、ある価値基準が指摘される。彼らはともに、効果的な弁証、人を感動させ煽動するようなスピーチを行うために、はっきりした（evident）イメージをはじめに持つことを求めたのだ。明証性は想像力と関連する。はっきりとした想像は、描写のための言葉を形成し、聞き手に情景を再現させるための条件になると考えられたのだ。そして、両者とも明証性（the evident）への感度を鍛えるための演習を重視していた。

この明証性（enargeia＝ギリシャの修辞学的用語をクインティリアヌスが訳してevidentiaとした）は、ルネサンス期、宗教改革との関連において、古代よりも重要視されることになった。カトリック宗教改革期のイエズス会では、信仰を広め教会の秩序を維持するために神の存在を受け手によりリアルに感じとらせることが重要になり、修辞学や弁証法が重要視されていた。神の存在を現前させるような話の技法として取り入れられたのが、クインティリアヌスなどのローマの弁証家が提唱した「明証性（evidentia）」を強化し鮮明なイメージを心の中に描くという手法であった。著者はイエズス会が優れた弁証家を育てるために構築した学問体系、*Ratio studiorum* (1599)の中心にクインティリアヌスの弁証法がおかれていたことや、その教えが知性だけではなく身体や口の動きにも重点をおいていたことを指摘する。デカルトが通ったイエズス会系のエリート養成機関ラ・フレーシュの学生たちも、実技を通して弁証法を学習したのだった [p.67]。

ここで求められる鮮明なメンタルイメージを生み出す能力をローマ時代のクインティリアヌスも近世のデカルトも同じように、神から与えられる天賦の才としてとらえていたが、イエズス会系の教育機関ではそのような能力を磨きあげる訓練を熱心に施していた。デカルト哲学においては、真理が「明晰・判明」に認識されるものであるとされるが、それはデカルトの受けたイエズス会系の修辞学教育において強調されていた価値観から派生し、醸成された観念であったというのが著者の論点である。

著者は最後にデカルトの「明晰・判明」への執心をライブニッツが心理主義的だと批判したこととふれつつ、このデカルトの主観的な価値観の源泉は、実のところカトリックの神秘主義をめぐる議論にあるのだと結論付ける。デカルトは修辞学の理論と実践から、鮮明なイメージを介して情熱を喚起させるという知の基準を設けたが、それは理性を超えた熱狂を帯びたものであったと著者は指摘する。主観から生じる神秘体験——聖なる啓示を直接的に受ける可能性——は、教会権力にとって危険なものであったにも関わらず、それを承認することによってカトリック改革は活性化されたと著者は解釈する。神秘家たちによる情緒的な霊性は、イエズス会のリーダー達にとっては危険なものでもあったが、それは人々をカトリックに向かわせるという目的のために役立つものだとは理解し、それを自らの権威のもとに(再び)回収しようとした。このため、直接的な霊的体験（神秘体験）をする者がいたとしても、それがイエズス会が提示している「霊操」を実践したが故に結果的にその体験が可能になったという説明がつくように、すなわち教会が神秘体験を承認する権力を維持するために、霊操を提供したのではないかというのが著者の議論である。このようにして著者は、デカルトの思想を、主観的に知を得る行為の中では、最も哲学的に興味深く且つ成功したものとして、神秘主義の系譜の中に位置づけることによって、本書

におけるデカルトについて論考が結ばれる。

以上、デカルトをあつかった第1部を中心に本書を概観したが、著者はデカルト、パスカル、ライプニッツの三名を純粋な「哲学者」として扱う解釈傾向の危険性を暗示しているように見受けられる。西洋哲学の伝統においては、神の存在の証明と関わりをもたない思想の方が稀であるように、「哲学者」と神の関係は切り離すことが難しい。しかし「哲学」はいつも純粋に思想的なことがらを扱うべきものとして、哲学者個人の宗教的背景を重要視せず、むしろそれを体系的に排除する傾向にある。そのような中でデカルト哲学は、物質と精神を切り分け、思考する事物としての人間主体を中心におく世界観を導入した近代化のアイコンとして機能し、流通する。「哲学」や思想といったものにも経済性—ある思想がある種の傾向をもった解釈によって再生産され、流通、消費される—があり、著者はそこにも間接的ではあるが問題を投げかけているように評者は思う。本書の著者は、哲学、宗教、数学、科学史といった学問の区分けによってもたらされる弊害を回避し、ある仕方で乗り越えることに成功している。だからこそ、本書は「哲学者」を純粋な思想の起源としてのみ捉える学問的区分に従うことの問題性を結果的に強く印象付けている。また、とりわけ哲学者の数学的な関心および思想形成の根底に、宗教道徳的な源流を見出すという視点は、評者にとって新鮮で興味深く見受けられた。たしかに本書にて扱われた「哲学者」についての考察は、どれもそれぞれの宗教・道徳観念とのつながりにおいて結論づけられているため、著者が効果的な議論をするために意図的な構想を当初から持っていたことは十分に考えられる。しかし、思想や本書の場合のように数学を検討するにあたって、それらが考案された歴史環境のコンテクストにおいて見直していくという仕事は、思想的な事柄のみを切り離して検討する解釈傾向から意識的に距離をおく方法であり、人文学のあり方を見つめ直す上で意義のある例を示してくれたのではないと思われる。

註

- (1) Jones, p.4. 以下、本書からの引用は、本文中当該箇所の直後に〔p. 〕のように指示する。また、本書に引用されるライプニッツやデカルトらのテキストを、本稿にさらに引用する場合、特に断らない限り、本書のページ数のみを記し、原テキストについては記さない。著者は参照困難なものも含め様々な版本を用いるが、それら全てを記すことは煩瑣に過ぎるし、本書評の目的にも適わないのである。なお、本箇所のセネカの引用に関しては、訳出に際し既存の日本語訳『ルキリウスへの手紙／モラル通信』塚谷肇訳、近代文芸社、2005を参照した。
- (2) イグナチオ・ロヨラ『靈操』門脇佳吉訳、岩波書店、58頁
- (3) 同上
- (4) 『音楽提要』（1618）や『精神指導の規則』（1628）など。
- (5) *Œuvres de Descartes*, ed. Charles Ernest Adam and Paul Tannery. 2nd ed.m p.407-8